

精神保健看護の教育・実践で活かすデジタルツール —教育・研修の現場から見えてきたこと—

○石塚 真美¹⁾、岡田 佳詠¹⁾、室井 慧^{2,3)}、蜂須賀 智子⁴⁾、氏家 好野⁵⁾

1) 国際医療福祉大学 成田看護学部 看護学科、2) 筑波大学 高等研究院 (TIAR)、3) 国際統合睡眠医科学研究機構 (WPI-IHIS)、4) 地方独立行政法人東金九十九里地域医療センター 東千葉メディカルセンター、

5) 株式会社Plusbase

【背景・目的】

近年、デジタルツールや生成AIの進展は医療・看護の領域にも変化をもたらしつつあります。2024年のIndeed Japan調査では、看護師のAI業務利用率は5.7%にとどまる一方、50%以上が今後の利用意向を示しており、関心と実際の活用との間にギャップが存在しています。また、約8割の医療機関がAIを未導入であり、活用の可能性を認識しながらも、個人情報保護やセキュリティへの懸念、情報リテラシーの不足が導入の障壁となっています。こうした中、看護の教育・研修の現場では、オンライン研修プログラムの導入やZoomを活用した遠隔での集団研修、動画・演習教材の活用など、デジタルツールを取り入れた多様な試みが広がりつつあります。例えば、認知行動療法 (CBT) の教育研修では、従来の対面形式からオンラインへの移行が進み、デジタルツールを活用した新たな教育の形が模索されています。さらに、生成AIを活用した文献検索や教材作成など、教育者自身の業務を支援するツールとしての可能性も注目されています。一方で、これらのツールを安全かつ効果的に教育・実践に組み込むためには、セキュリティ対策や情報リテラシーの向上が不可欠です。

本ワークショップでは、精神保健看護の教育・研修の現場でデジタルツールをどのように活用しているかを参加者とともに考えます。教育・研修におけるデジタルツール活用の実際と課題を共有し、参加者がその可能性と留意点の両面から理解を深め、明日からの実践につなげることを目的とします。

【内容】

ワークショップは90分で構成し、以下の展開で進めます。冒頭では、精神保健看護の教育・研修におけるデジタルツール活用の現状と可能性について概

観し、どのようなツールがどのような場面で活用されているかを整理します。次に、CBT研修のオンライン化やZoomを活用した集団研修、動画・演習を用いた遠隔教育など、教育・研修の場で実際に行われている取り組みを具体例として紹介します。続いて、精神看護専門看護師 (CNS) の立場から、現場での教育研修や実践活動の中でデジタルツールがどのように活かされているかを報告します。さらに、LINEを活用したCBTベースの相談支援アプリの実装研究を紹介するとともに、個人情報保護やセキュリティ対策、現場における情報リテラシーの課題と対応策を共有します。後半では、参加者同士のグループワークを取り入れ、それぞれの教育・実践の現場でのデジタルツール活用について意見交換を行います。

なお、昨年度の第35回学術集会では「AIで進化する精神看護」として同テーマのワークショップを実施しました。今年度は、昨年の成果を踏まえつつ、初心者にも門戸を広げた構成とし、教育・研修の現場での活用に焦点を当て、内容を充実させています。